

上田岳弘 ×
高橋一生

小説

古川真人

シャンシャンパナ案内

『最愛の』
刊行記念対談

透波と乱波

新連載

滝口悠生

ケリー・リンク

未邦訳
短編

金子ゆき子
訳・解説

白猫の離婚

すばる

講演 父・福永武彦のこと

池澤夏樹

二匹の虎

小説

温又柔

墮天使の加速
—Tohji論—

赤井浩太

すばるクリティーク

2023

12

対談再録

アニー・エルノー × 津島佑子 現代を生きる情熱

群馬県立近代美術館で、鈴木ヒラクの個展「今日の発掘」が開催されている。展覧会に合わせ、鈴木木の初のエッセイ集『DRAWING ドローイング 点・線・面からチューブへ』も刊行された。

著書の題名にも示されているように、鈴木木の関心の中心にあるのは「ドローイング」である。絵画の分野では「ドローイング」は、完成作としての油彩画に対して、習作としての素描という意味があり、従属的な軽いものというニュアンスを伴って用いられることも多い。

だが鈴木木は、「ドローイング」をその原義、すなわち「線」を引く（draw）こととして、油彩画から独立したものであると捉える。そして、それを「引く」という行為の痕跡としてだけでなく、世界の法則を目に見るように「引き出す」ものとも考えている。

さらに鈴木木の独自性は、線をチューブに喩える点にある。国境のように何かと何かを隔てる境界線ではなく、ものが通る抜けだけの太さを持ち、何かと何かを繋げ、

Art

プレイヤー/美術
見えないものを引き出す線
驚田めろろ
「鈴木ヒラク 今日の発掘」展
群馬県立近代美術館

行き来を生み出す通路としての線。

例えば、本展の「廊下」には、長く続くロール紙が両側の壁に貼られ、そこに曲がりくねった細い木の枝が無数に立てかけられている。枝の先には銀色のインクが付い

ており、ロール紙には同じ銀色の引つ掻いたような跡がある。作品解説によると、これはワークショップの「記録」で、「枝を『通して』線を引くことを試み」たという。確かに、枝も線であり、同時に樹液を流すチューブである。その枝を握る腕も同様に、血液や神経が通うチューブであり、人と植物という違いを超えて、連続するもののように感じられる。その先が紙に触れたとき、そのチューブがさらに紙の上に乗って伸びて線となるようなイメージだろうか。

個々の作品だけでなく、本展の展示構成に関しても、入り口に掲示された挨拶文に、磯崎新が設計したこの建物が「作品が通り抜けていく空洞として構想」されたとあり、はつとさせられた。本展は「展示室4、5」と一つの「廊下」を使って開催されているが、美術館において「展示室」と「廊下」を明確に区別することは実は難しい。廊下がどこまで広がれば部屋になるのか。「ギャラリ」の意味は「回廊」であり、宮殿の廊下のような空間に絵が掛けられたことが美術館の一つの起源である。本

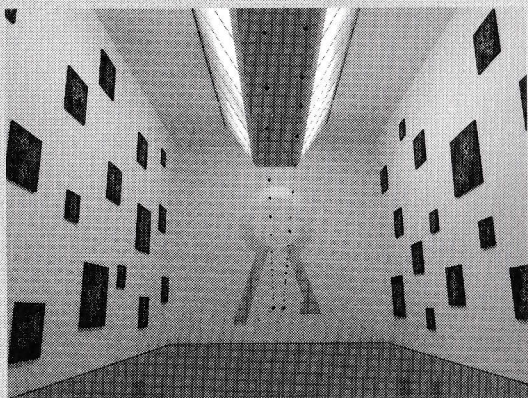
展で使われた3つの展示空間はひと続きになつており、一本のチューブとして捉えることができる。つまり、ドロ잉グなのだ。順路もいずれの入り口から進んでも見られるように設定されている。

このように、鈴木作品を見て、その考えに触れると、「ドロ잉グ」の意味が拡張され、様々なものを「ドロ잉グ」として捉えることができる。このことが、鈴木と言う「意味を」引き出すということなのだろう。

3つのうちの真ん中の展示空間（展示室5）では、壁から壁へと頭の上にワイヤーが2本渡され、中空に線を描きながら、いくつもの石を貫通し、浮かせている。そのワイヤーが取り付けられた壁には、鍵の穴のような図形が太い銀色の線で描かれている。反対側の壁にも同じ太さの同じ色の線で、上部が一部欠けた円が描かれている。

何かの暗号のように見えたが、作品解説によるとこれは、美術館の近くにある前方後円墳、観音山古墳を上空から見た形だという。なるほどそう見ると、上が欠けた円形

は、トップライトを取り入れるために天井から出っ張っている構造物の台形と組み合わせ



《観音山古墳の印象》と「隕石が書く」の展示風景（展示室5）（撮影＊筆者）

わさって、一つの鍵穴形を構成することがわかる。建物の一部が、この空間的なドロ

ーイングに取り込まれているのだ。そのことによって、トップライトが天井に沿ってチューブ状に伸びていることもまた意識され、それがワイヤーの線とも相まって、この展示室の長辺方向の方向性を強めるとともに、建物に意識を向けることで展示室が筒状であることをより強く感じさせる。

石は、両側の壁面全体に天井までの高さを使って、お互いに距離を取って展示された数々の平面作品の表面にも取り付けられている。これらは無数に小さな穴のあいた溶岩である。石の穴から出てきたエネルギーが発散されているかのように、周囲に銀色の線が描かれている。そして、画面を超えた石同士の配置は、星座を構成する星のようにも見える。

鉱物への関心は、古墳時代という人類の歴史を超えて、地球や宇宙の誕生というところまで想像を広げさせる。

展覧会タイトルの「発掘」には、見えない線を可視化するという意味とともに、根源へと掘り進める意思が込められているように感じられた。